

戦争前後の神奈川県と貸出文庫

1 貸出文庫発見される 「戦時文庫」の成立

昭和44年(1969)、戦後、中世歴史博物館として再出発した金沢文庫に、横浜高島屋から展覧会開催のため、仏像の出品依頼がありました。そこで準備作業をおこなっていたところ、展示室にあった須弥壇(しゅみだん)という仏像を安置する台座の下からおびただしい数の図書が発見され、その内容から戦時の貸出文庫の図書の一部と判明しました。

しかし当時の金沢文庫は、書庫と収蔵庫を仕切って使用する状態で、書庫スペースは狭く、汚破損や散逸の恐れがあるため、他に保管場所を求めべく検討をおこなった結果、県教育長(同教育センター所長)の内諾を得て、教育センター図書室の地下書庫にこれらの図書は移されることになりました。

その後、約10年の歳月が流れ、教育センターの書庫が次第に手狭になったこともあり、昭和54年(1979)5月、県立図書館が貸出文庫図書を一括して受入れることを決定し、特別文庫として受入・整理をおこないました。こうして県立図書館の特別コレクション「戦時文庫」が誕生したのです。

それでは、県立図書館が所蔵する「戦時文庫」が、どのような経緯でコレクションとして当館に収蔵されるに至ったのか、その変遷について、「戦時文庫」の母体ともいえるべき金沢文庫実施の貸出文庫の歴史の中から紹介したいと思います。当時の貸出文庫に関する資料、特にその後の貸出文庫図書のゆくえについては、ほとんど資料が無く、調査は困難な作業となりました。

2 貸出文庫の開始

文部省は昭和8年(1933)の改正「図書館令」により、中央図書館制度を確立し、その活動の大きな柱として、貸出文庫の設置を全国の都道府県に義務づけましたことは先に述べたとおりです。これは当時の図書館界からも、中央図書館設置の気運を盛り上げるものとして、また各地の図書館の普及充実に大きな福音をもたらすものとして受け止められたようです。特に、県立図書館がなかった神奈川県では期待が大きく、神奈川県図書館協会は県知事あてに「県立図書館の設置促進並びに巡回文庫の施設実現」について建議書を提出したほどでしたが、この時点では実現されませんでした。

昭和14年(1939)になると日中戦争の局面はとみに進展し、文部省は推薦図書の普及による国民の戦時意識の強化を図ります。また、翌昭和15年(1940)は皇紀二千六百年にあたり、これを記念するとともに、いわゆる新体制運動の中で、戦時下国民精神の高揚を図るため、文書教育の振興を全国的に押進めていきます。

そうした気運のなか、神奈川県は昭和15年度予算案の中に新規事業として貸出文庫費7000円を計上し、学務部社会教育課が所管し、実際の運営は県中央館の代用館として金沢文庫がおこなうことになりました。こうして昭和15年(1940)7月1日、鎌倉市立図書館、金沢小学校図書室、鶴沼図書館、藤沢第二小学校の四ヶ所を皮切りに、いよいよ第1回貸出文庫の廻付が実施されることになったのです。

3 貸出文庫の盛衰

それでは実際に、貸出文庫はどのように運営されたのでしょうか。資料によれば、廻付先は上記四ヶ所を含め県下の公・私立図書館、学校、青年団、病院などで、使用料、運搬費その他は無料で送付したようです。また、貸出用図書は時局(赤)、産業(青)、教養(黄)、趣味娯楽(白)の四つの分類に色分けされ、本の背表紙の下段に色テープを貼り、タイトルページには「神奈川県貸出文庫図書之印」が押印されました。

廻付冊数は一ヶ所あたり 50 冊までとし、貸出期間は 3 カ月、これをズック張りの柳行李に詰め、一ヶ所当たり年 4 回、200 冊の廻付をおこないました。廻付先は昭和 17 年(1942) 5 月現在で、県下 66 ヶ所にのぼり、実際に職員が廻付先をまわり指導をおこないましたが、あまりの激務に倒れる職員もでたと記録されています。また「神奈川県貸出文庫の栞」、「神奈川県貸出文庫図書目録 第一冊」を刊行・配布して普及を図るなど、他県の貸出文庫の状況にくらべても、かなり活発な活動だったことがうかがえます。

しかしその活動も、昭和 19 年(1944)にはいと戦局は極度に悪化し、金沢文庫の担当職員の出征が相次ぐなど、貸出文庫の活動はほとんど不可能な状態に落ち入り、やがて終戦を迎えることになりました。こうして貸出文庫の図書資料も歴史の闇の中に埋もれていったのです。



貸出文庫で使われた柳行李

4 貸出文庫はどこへいったのか

この稿のはじめに「戦時文庫」は貸出文庫の一部と書きました。それでは、「貸出文庫の全体」はどこへいったのでしょうか。貸出文庫のゆくえの中から、「戦時文庫」の位置を見てみましょう。

まず、貸出文庫の最終的な冊数およびタイトル数を確認する必要がありますが、「金沢文庫復興三十年誌」によれば、終戦後、戦時中に廻付したままの貸出文庫の回収作業をおこなった際の調べがあり、これによれば「昭和 21 年(1946) 9 月現在で、貸出文庫用図書総冊数は未回収分を含め 6333 冊」と記述されています。

ただ、貸出文庫図書は一度に複数の廻付をおこなうため、6333 冊の中には多数の副本が含まれており(1タイトルにつき、およそ 3 ~ 4 冊)、タイトル数は確定できませんでした。そこで、金沢文庫発行の雑誌「金沢文庫と郷土」に掲載された月別の貸出文庫図書目録を昭和 15 年(1940) 4 月 ~ 18 年(1943)10 月まで積算してみたところ、1639 件となり、ここから最終的なタイトル数は 1750 ~ 1800 件程度ではなかったかと考えています。

それでは、記録をもとに貸出文庫がその後、どのような変遷をたどったのか記してみましよう。

- (1) GHQ の接收を恐れ、須弥壇の下に隠した図書(のちの「戦時文庫」1570 冊)
- (2) GHQ に接收された図書
- (3) 金沢文庫の蔵書として編入した図書(貸出文庫は蔵書本体と区別して管理していた)
- (4) 金沢文庫蔵書に編入し、その後、一部を県立図書館の一般書および郷土資料に管理換えした図書
- (5) 廻付先で罹災した図書
- (6) 他の図書館に無償で譲渡した図書

(1)および(2)については、昭和21年(1946)3月17日付の連合軍総司令官の覚書による、軍国主義的な図書の没収指令にすべては端を発しています。この没収指令は、同3月27日付内務省警保局長により、各地方長官あてに出された通牒に始まり、昭和23年(1948)4月15日まで前後46回、7700冊余りにおよび、具体的な没収リストをつけて通達されました。

前述の「金沢文庫復興三十年誌」の年譜によれば、昭和21年(1946)5月18日「軍国主義的図書の整理処分をはじめた」とあり、同9月6日「貸出文庫用図書、雑誌その他、書庫内の整理をはじめ」とあります。おそらくこの頃、金沢文庫の職員によって、後世の資料として保存すべきという考えから、貸出文庫の中で少しでも軍事色のある本の正本1570冊を、須弥壇の下に密かに隠したものと思われる。(ただし、1570冊の中には戦時色の強い図書で、貸出文庫以外の資料も数十冊含まれており、これも戦時文庫として整理されています)

(2)のGHQによる接收については、「金沢文庫復興三十年史」によれば、金沢文庫に対し昭和21年(1946)5月30日に「軍国主義的出版物の没収指令があった」こと、それと前後して「軍国主義的図書の整理処分をはじめた」ことが記されています。また「神奈川県図書館史」によれば同年12月27日には神奈川軍政部教育担当の高官が金沢文庫に巡視に来ているとの記述もあります。かなりの数の本が接收されたのではないかと考えられますが、記録がなく実数はわかりません。

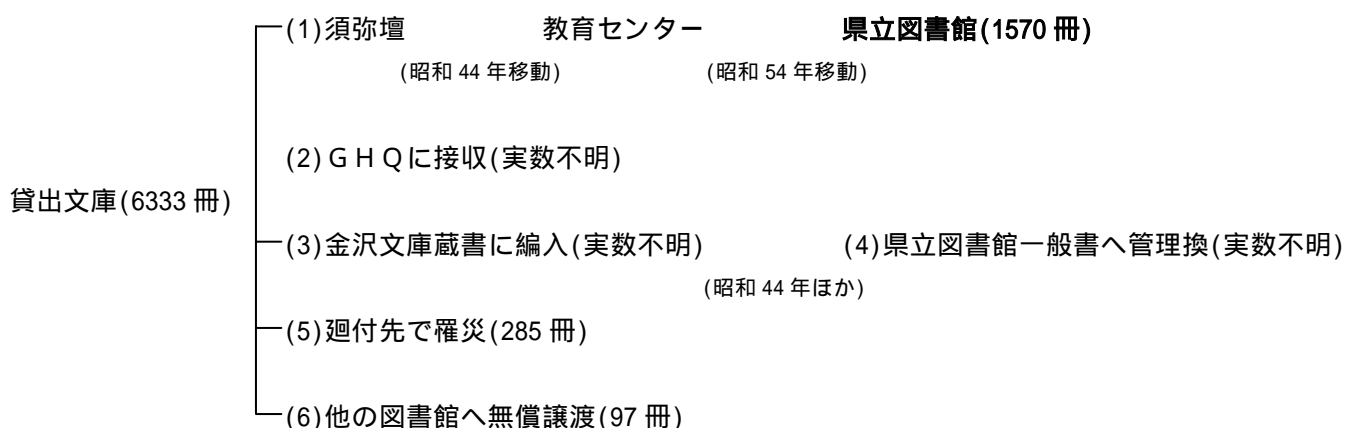
(3)については、貸出文庫の中で文学作品など戦時色の薄いものを、金沢文庫の蔵書として編入したもの、また(4)は、かなりの時を経て、その一部を県立図書館に管理換えした図書を指します。金沢文庫のOPAC蔵書データを検索すると「神奈川県貸出文庫図書の印あり」と注記されているものが23件確認できます。もちろん実数はこれを上回るものと考えられます。

また、金沢文庫から県立図書館に一般図書として管理換えされた旧貸出文庫の総数も判明していませんが、昭和44年(1969)3月24日に管理換えされた図書132冊の内、18冊が貸出文庫図書であることが確認できました。

(5)の罹災した図書については、昭和21年(1946)4月現在の「県管下図書館現況調査表」によれば貸出文庫図書285冊が罹災、滅失したということです。

(6)は昭和17年(1942)9月、破損図書で廻付から除かれた遊休中の図書97冊を、大師図書館ほか10館に無償で交付したとの記録があります。

これを図に示してみると次のようになります。



以上、貸出文庫のその後のゆくえについて調査結果を記してみましたが、不明の点につきましては、今後も調査を続けたいと思います。

5 おわりに

ここまで、戦時文庫図書を含めた神奈川県内の貸出文庫が、事業としてなぜ成立したのか、どのように実施されたのか、収集・利用された図書はどこへいったのか、という流れで書き進めてきました。

当館の「戦時文庫」は時代の特徴を反映しており、第一は、貸出文庫に含まれる「戦時文庫」が、日本の戦争期にあたる昭和16(1941)年から昭和19(1944)年に出版された図書がほとんどであるため、その当時の緊迫した社会状況を忠実に反映していること。第二点として、GHQの処分から逃れるために金沢文庫の須弥壇の中に隠匿されていたものであったことによります。

このように「戦時文庫」は、敗戦の日を境にして価値観が大きく変動した時代を潜り抜けることによって、二重の時代の刻印を持つ希少な資料群となりました。

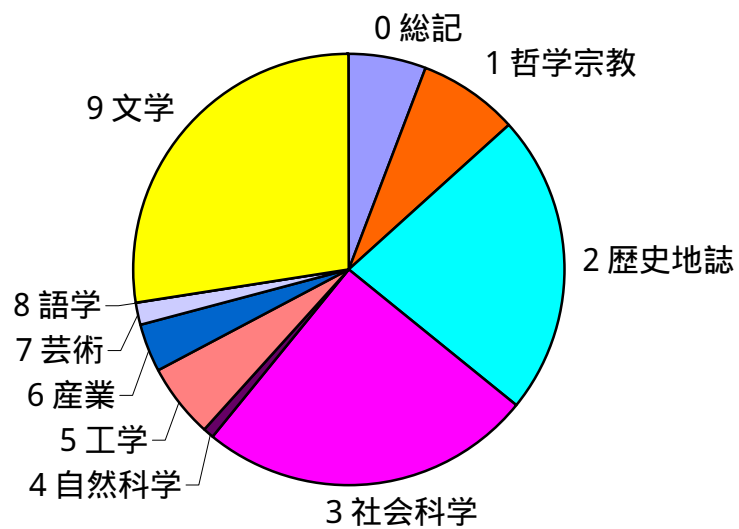
図書館は社会的、時代的制約を受けて存在するものですが、その使命の一つとして、社会に出た多様な価値観や意見を異にする資料を収集し、後代に伝えるというものがあります。当館としては、戦時の間に刊行された図書を「戦時文庫」として引き受け、蔵書に加えることにより、こうした社会使命を果たせるものと考えました。

この「戦時文庫」目録を刊行することによって、今後、県民の皆様方の戦時及び戦後文化の調査・研究の糸口になれば幸いです。

戦時文庫分類別冊数

分類	一般書	児童書	計
紙芝居	0	6	6
0門 総記	76	0	76
1門 哲学宗教	95	16	111
2門 歴史地誌	294	78	372
3門 社会科学	321	35	356
4門 自然科学	14	8	22
5門 工学	71	24	95
6門 産業	46	2	48
7門 芸術	21	5	26
8門 語学	3	1	4
9門 文学	353	101	454
計	1294	276	1570

一般書



児童書

